

題目：秩序維持のために他者をサンクションしますか？

—サンクションングのタイプ間比較実験—

氏名：中川 遥

指導教官：高橋 伸幸

人間の血縁関係の枠を越えた協力行動について、サンクションに焦点を当てた研究はこれまで様々な角度から行われてきた(Fehr & Gächter, 2002; Yamagishi, 1986; Rand, Dreber, Ellingsen, Fudenberg, & Nowak, 2009)。先行研究から、人間は自発的にサンクションを行う可能性が高いということや、サンクションとして罰を行使する人はいつも良い評判を得られるわけではなく、罰を行使したことで何らかの利益を得ているとは言えないため、罰を行使する人は適応的にはなりにくいという事が示唆されていた。

しかし、先行研究間では、サンクションの主体が「個人」か「グループ」で統一されておらず、またサンクションのタイプも「罰」か「報酬」か「罰と報酬の両方」とまちまちであった。

そこで本研究では、4人1グループで繰り返しSDを用い、サンクションの主体（「個人」か「グループ」）とサンクションのタイプ（「罰」か「報酬」）をシステムティックに比較できるように2×2の4条件を設け、サンクションとSDについての仮説を検証した。具体的には、①サンクションは主体がグループの方が主体が個人の場合よりも多くなる、②サンクションは報酬の方が罰よりも多く使われる、③サンクションの主体がグループの場合には、罰が増加し、罰と報酬の差が小さくなるという形での交互作用効果が現れるというサンクションについての3つの仮説と、④サンクションの主体がグループの場合の方が個人の場合よりもSDでの協力率が高くなる、⑤サンクションで罰を使う方が報酬を使う場合よりも効率よくSDでの協力率を上げられるというSDに関する2つの仮説を検証した。

実験の結果、仮説①と仮説③は有意差が見られず支持されなかった。仮説④は仮説とは逆の結果が得られ、仮説②と仮説⑤は支持された。このことは、サンクションの使用頻度・使用形態に主体による差は見られず、報酬の方が罰よりも多く使われ、更にSDに関しては、主体が個人の方がグループの場合よりも協力率が高いということ、サンクションとして罰を用いる方が報酬を用いるよりもSDの協力率を効率よく上げることができるということを示している。またサンクションの際、実験参加者は主体がシステムの方がより抵抗感を感じ、報酬の方が周りから期待されている行為だと考えていたこと、SDでは、主体が個人の場合の方がグループの場合よりも、供出金額を少なくすると自己嫌悪に陥ってしまいそうで嫌だと考え、更に他者から利己的であると思われたくないと思っていたことも明らかになった。